

まえがき——今、なぜ湛山か

佐高信

田中秀征さんとの出会いは私にとって人生の事件だった。一九七二年（昭和四七年）に山形県の高校教師をやめて上京し、経済誌『VISION』の編集者となった私は、衆議院長野一区に保守系無所属として立候補して一敗地にまみれた秀征さんと知り合った。

最近、秀征さんは当時書いた『自民党解体論』（一九七四年）を旬報社から新装復刻したが、それを私は二〇二四年四月二二日付の『日刊ゲンダイ』で熱烈推薦した。その一文をまず次に掲げたい。

私より5歳上の著者が30代で私が20代の時に寄稿者と編集者として私たちは出会った。ちょうど50年前に出てゝ幻の名著ゝといわれた本が、いま、新装復刻された。その契機となる同名の論文を私が勤めていた『VISION』に書いた経緯を著者はあ

るコラムでこう明かしている。

「私はこの雑誌に彼の強い勧めで『自民党解体論』を連載し、保守政治の将来に警鐘を鳴らした。しかし、無力な私が小さな雑誌で叫んでも政治的影響はほとんどない。それでも二人は意気盛んで、熱っぽく議論したものだ」

その後の著者の活躍は改めて記すまでもないだろう。宮澤喜一が「私の頭脳」と呼び、村山富市は全幅の信頼を寄せた。

いま、まさに自民党が解体しようとしている時、その後の責任勢力の再建がどういう方向でなされなければならないかをこの本は示してあまりある。自民党の中にいたことがあるだけに、たとえば二世議員批判も説得力がある。「彼らは、維持者としての使命を忠実に果たすために、何かしているふりをしながら、『何もしない』ことを厳しく要求される」とし、「彼らには、存在は許されても、行動は許されていない」と結論づける。

チャーチルは「ペンだこのある政治家」といわれたが、著者のペンもシャープでみずみずしい。

「復刊にあたって」で著者は自民党結成30周年の新綱領に「憲法を尊重する」という

一項を入れようとした時のことを振り返っている。それをめぐって「右派宗教団体」が著者を徹底的に叩き、怪文書を選挙区にバラまいたというのだが、それが統一教会であることは明らかだろう。そうしたものと決別しないで自民党が再建できるはずがない。しかし、自民党の中に断固とした決別の機運は見えない。私の分類で言えば、ダーティーなタカばかりになってしまった。

この『自民党解体論』を渥美清あつみきよしが買って読んだという。渥美も著者が執筆の場所にしていた駒沢通りのカフェの常連で、店主にひと言、「勉強になったよ」と告げたとか。

「彼がその店で本書を読んでいるとき、私と会って遠くから立って頭を下げてくれたのがうれしかった思い出です」と著者は書いている。

著者は石橋湛山の孫弟子を自任しているが、この本は湛山思想を基にした現代の実践的「自民党解体論」である。

ところで、今、石橋湛山は、世界的にも注目され、読まれている。

その一人が米国の学者、リチャード・ダイク氏だ。氏は、ハーバード大学のエズラ・ヴ

オーゲルの下で日本研究で博士号を得た学者だが、転身して日本で半導体関連の企業を経営してきた異色の人である。学問への関心を持ち続け、湛山を知って著作の翻訳に取り組んだ。

「いま私は石橋湛山の英訳に取り組んでおり、毎朝3時間『石橋湛山全集』を読んでいます。石橋湛山は本当にすごい思想家ですから、全集を読むのはとても楽しい作業です。湛山はアメリカであまり知られていませんが、アメリカにとっても重要な人物です。現在、アメリカは政党政治と米中関係の危機に直面しています。いまの米中関係は最悪で、冷戦の時代に逆戻りしています。アメリカの中国に対する批判は、共産主義に対する批判と二重写しになっているのです。アメリカがこれらの危機に向き合う上で、かつて日本の政党政治や日中関係の危機に立ち向かった石橋湛山の民主主義論や中国論はとても参考になります」(『超党派石橋湛山研究会』発足!)『月刊日本』二〇二三年七月号)と語っている。

ダイク氏のことは、二〇二二年九月八日付の朝日新聞「ひと」欄で知った。「米国の学者は、日本の民主主義は米国の占領がもたらしたと考えがちです。そのため、湛山に注目してこなかったのでは」と語っているのに着目した。



石橋湛山  
写真 共同通信社／ユニフォトプレス

ダイク氏は、二〇二三年六月一日、永田町に超党派の「石橋湛山研究会」が発足した際、その記念講演で、こんな発言もしている。

「石橋湛山の理想を実現したのが田中角栄だった」

一九七二年、日中国交回復のために中国を訪問する前、田中が石橋邸を訪れて「これであなたの夢は実現します」と語ったことに触れ、そう断言したのだ。

私はこの発言を聞いて、さらにダイク氏に関心を抱き、『月刊日本』（二〇二三年八月号）

で、石橋湛山没後五〇年の対談をした。

タイトルは「日本はアメリカと心中するのか」

そこで私はダイク氏にこう言った。

「湛山はアメリカでは必ずしも評判は良くないですよ。GHQ（連合国最高司令官総司令部）が日本を占領していた時代には、湛山は吉田

(茂)内閣の大蔵(現・財務)大臣として占領軍の駐留経費に切り込むなど、事あるごとにGHQと対立していました。その後、湛山は総理大臣になりますが、すぐに病氣になって退陣してしまいました。だから、アメリカで湛山に興味を持つ人がいるとは思っていませんでした」

読者には意外かもしれないが、私は湛山と角栄に三つの共通点があると思っている。

第一に、米国の言いなりにならず、主張すべきことを主張したこと。軍国主義に徹底的に抵抗したジャーナリストだった湛山が、何と公職追放になったが、それは吉田茂がGHQと組んで追い出したとも言われる。角栄もまた米国に先んじて中国との国交回復を推進したことが、とりわけキッシンジャーの怒りを買って、ロッキード事件の犠牲になった。民間機の角栄より、軍用機の中曽根康弘の方が巨大疑惑なのに看過されたことは確かである。

第二に、ともに官僚出身ではなく党人派であること。実際、角栄の自民党総裁就任は、湛山以来、一五年ぶりの党人総裁の実現だった。また、これは党人派すべてに言えることではないが、結果的にせよ、世襲を排したことを挙げたい。湛山は息子に継がせる気もなかったし、息子も継ぐ気もなかった。党人の民権派である松村謙三もそうだったが、現在

はびこっている「公職私有」など論外と、親子ともども考えていたのである。角栄の場合は娘が継いだではないかと言われるかもしれないが、孫にその気がなかった。これは重要なことだろう。

第三に、女性に対する差別意識がなかったことを挙げたい。私が湛山伝を書いた際に、最も印象に残ったのは、娘が、次のように回想したことだった。「父からは、女のくせにと言われたことは一度もありません」（『孤高を恐れず』講談社文庫、一九九八年）。湛山の育った時代を考えれば、これは稀有なことなのではないか。

角栄は姉妹に囲まれた「ただ一人の男」として育ったために、女性を大事にし過ぎるほど大事にした。いわゆるタカ派が家父長制的考えで女性を差別しがちであるだけに、この点は非常に重要だと私は思う。

湛山は宏池会をつくった池田勇人を重用し、池田は佐藤（栄作）派ながら角栄を重用した。経済重視と軽軍備、つまり民の生活を大事にする政治の系譜だ。現在の岸田派はとも宏池会とは言えず、安倍派の清和会に近い清和会垂流だが、宏池会本流の前尾繁三郎、大平正芳、そして宮澤喜一は湛山を尊敬し、湛山の著作に親しんできた。

労作『田中角栄―戦後日本の悲しき自画像』（中公新書、二〇一二年）の著者、早野透は

「戦後民主主義の上半身は丸山眞男が形成し、下半身は田中角栄が支持した」と喝破したが、それは丸山を湛山に代えた方が、より実態に近いだろう。「上半身は湛山が形づくり、下半身は角栄が支えた」のである。

その特色は批判や異論を大事にすることだった。安倍晋三のように「あんな人たち」などとは口が裂けても言わないのである。

私はその湛山の流れを汲むのは、中村哲だとも思っている。言うまでもない。戦乱と干ばつに苦しむアフガニスタンで、三六年間にわたり人道支援を続け、医師という立場を超えて井戸の掘削や水路の建設にも取り組み、多くの命を救った人物である。一六〇〇本以上の井戸を掘削、二五キロ以上の用水路も建設し、砂漠化した大地に緑を蘇よみがえらせたが、二〇一九年に何者かに銃撃され死亡した。

その中村は、憲法九条に何度も助けられたと言っていた。日本は憲法九条のおかげで他国を侵略しない国と見られていたので、現地で活動していても敵意を向けられなかった、というのだ。私から言わせれば、まさにこの中村の考え方・行為に、湛山から角栄へと脈々と続く精神が息づいている。

今、なぜ湛山か。ここまでお読みいただいたら、それなりの関心を持っていただけるの

ではないか。

この湛山精神を今の世にどう復活させるか。私を導いてくれるその案内役は、田中秀征さんをお願いした。

秀征さんは、一九九〇年代前半の新党ブームの火付け役「新党さきがけ」の理論的指導者で、湛山の論跡や業績を深く研究し、宮澤喜一、石田博英、宇都宮徳馬、井出一太郎ひろひで氏ら湛山とゆかりのある人々ともつながりを持ってきた人だ。「私は湛山の孫弟子と言われたことを最大の誇りにしているんですよ」とも語っている。私が知る限り、湛山を語り、かつその精神を実践してきた第一人者である。

この国の知的財産である湛山の思想を今にどう生かすか。秀征さんと私の対話から汲み取っていただければ幸いである。

なお、『西山太吉 最後の告白』（集英社新書、二〇二二年）に続いて、強烈な問題意識でこの本をまとめてくれた毎日新聞元政治部長の倉重篤郎さんに深く感謝いたします。